

## 《公開講演会記録》

## 日本人の心と漢詩

全日本漢詩連盟会長 石川忠久



## 黄河文明

今日お話しすることは、まず漢詩の生い立ちと、日本人がこれをつくるに至ったこと、日本人の漢詩というものはどういうものかということです。

世界の4大文明は、ナイル、ガンジス、チグリス・ユーフラテス、黄河という四大河の流域で起きましたが、黄河以外の3つは、最初からずっと現在まで続いてはいません。途中で途切れています。黄河流域の中国文明だけは今も続いています。中国文明というのは非常に特殊性を持っているわけです。

古さからいえば、エジプト文明のほうが黄河文明より古いです。しかしエジプトの文明は途切れしました。その一番の証

拠は、1799年にナポレオンがエジプトに遠征して、ロゼッタ・ストーンを見つけました。しかし、ロゼッタ・ストーンに書いてある古代の文字を誰も読めませんでした。ということは、その文明は断絶したという証拠です。それから30年も経って、シャンポリオンという天才的な言語学者がやっと解読しました。

チグリス・ユーフラテス文明は今、ご承知のようにひどいことになっています。その中で中国文明だけはずっと長く続いているわけです。

1899年に、中国では、河南省安陽の「殷墟」というところから、亀の甲羅や動物の骨に書かれたものが出てきました。殷墟、つまり殷の都跡らしいとは言われていましたが、一面の麦畑で、何もないところでした。

昔、北京の薬屋ではマラリアに効く龍の骨と称するものを売っていました。ある時、ある学者がそれを買ったところ、龍の骨の中に、鋭い刃物で傷が付いているものがありました。さすがに学者です。これは漢字の先祖であると彼はピンときたんですね。文明がつながっている証拠ですね。それで北京中の薬屋から龍の骨を集めました。20世紀になって大々的な発掘が始まりました。

果たしてそこに殷の都があったことが証明されました。大きなお墓ができました。亀の甲羅、甲羅といっても柔らかない腹のほうですが、その腹甲羅に何かを刻んだものが出てきました。それは殷の時代の人々が占いをした、占いの文句を書きつけていたものでした。その腹甲羅に穴を開けて焼けた火箸みたいなのを突っ込み

ますと、「ボク」って筋がつくんです。筋目で占っていたんです。

その筋目の字が、「ト（ボク）」と「口」で、「占」という字になっているのです。亀とか、牛とかの大きな動物の肩甲骨を使って、ひびの様子で占って、それを書いて記録したのです。おびただしい数の記録が残っています。それが大きな建物にあったのですが、表烟に変わってしまいました。たまたま大雨が降って、土が掘れて、何やら出てきた、それを北京のずる賢い薬屋が、「龍」の骨としてマリアに効く薬といって売っていたのです。これは20世紀のことです。

龍の骨に刻まれていた文字を研究する学問を「甲骨学」といいますが、まだ発展途上で、毎年新説が出てきます。これで殷の時代の様相は分かってきました。どういう生活をしていたか、どういうことを考えていたかなどが記録されています。そして、詩らしきものもあるのです。

それはごく簡単です。「今日雨降るか それ西より来たりて雨降るか 東より来たりて雨降るか」。いかにも拍子を取りながら、唱えているようなものが刻ん



甲骨文

である。声を合わせて、歌うように言っていたのではないかと思います。これを詩の先祖と言え、言えないこともありません。

### 詩の始まり

本題に入りますが、ずーっと時代が流れて、今日に残っている最古の詩集とされるのが「詩経」です。昔は「詩」と言え、ば「詩経」のことでした。古い詩は、周の初め、紀元前12世紀ごろのものが残っています。その後約600年間の作品が、305編残っています。驚くべきことです。3千年以上も経っていながら300

も残っているのです。

孔子は2500年前の人ですが、孔子の時代というか、「論語」の中にすでに「詩300」と書いてあります。ですから、孔子が見た詩経と我々が見る詩経とはあまり変わらないのです。

これは一句が四字です。四言詩です。長いものもありますが、これがスタンダードです。殷が滅びた後が周ですが、周の時代のいろいろなことが謳われています。概して暗いものが多いのです。人々は虐げられていたわけでしょうから、その虐げられた鬱憤を謳っているものが多い。中には明るいものもあります。例えば娘の嫁入り。娘が嫁入りするときには拍手をしながら送り出すというような、生活に根ざした明るい詩です。場所は概ね今の黄河流域です。

黄河の流域から文明が生まれ、それが南に及んでいって、昔はジャングルであったと思われる楚の国。楚の国は、今日でいうと揚子江の流域で、湖北省、湖南省が中心です。北からの文明がだんだんジャングルを切り開いて南下しました。高温多湿ですから、作物もよくできる。春秋の半ばごろから、強い国になりました。西の秦、東の齊、南の楚、この3つの国が「三極」としてずっと続いていきます。

詩経の流れがずっと沁み込んで南に及んで、新しいうたができました。それが「楚辞」です。これはそれ以前のものとまったく違って三語が基調です。新しい三語の基調がいつのまにか南から起こってきたわけです。詩経の四言の詩は、孔子の時代には古典となり、古典として受け継がれていたわけです。

この楚の国のうたを集大成したのが屈原です。詩経の時代の詩は皆、読み人知らずですから、屈原は最初の詩人ということになります。およそ紀元前4世紀ごろの人です。この屈原が、楚辞を集大成し、それが今日に残っています。

続く漢は、秦の始皇帝の後、紀元前3世紀の終わりごろから天下を取って約200年が前漢、その前漢が終わるころが、キリスト起源の始まりですが、後漢がまた200年、キリスト起源を挟んで、前2000年が前漢、後2000年が後漢です。この時代に新しい詩が起こりました。

それは五言です。上が2、下が3です。これで論争が起こりました。詩経の基本が2、楚辞は3だから、2+3で5だという考え方の一方で、それへの反対論が起こりました。

秦の始皇帝が天下を統一した時に、シルクロードが開けました。遠くはローマ、



古代中国の概念図

近くはペルシャ、そういうところものいろいろ入ってきて、楽器も入ってきました。そのころの楽器で分かっているのはハープ。マンドリンのようなポータブルな弦楽器ですが、一緒に新しい音楽も入ってきただろうということは容易に想像されます。

となると、従来の「トントントント」という2でもなく、「トントントントントントントント」の3でもない、「トントントントントント」の4でもない、新しいものがどうも外から入ってきたのではという説が起こったのです。私はこれには合理性があると思っています。

つまり内在説と外来説があるわけです

が、どうやら外からの刺激で五言詩ができたのではないかと思います。五言詩が生まれたのは、紀元前1世紀です。このころになると、一句五字のものが出てきます。

漢の武帝のころ、紀元前2世紀の終わりから1世紀にかけてですが、そのころからだんだんとそういうものが始まって、1世紀になるとそれが形を成してきます。そして紀元後の1世紀になると、ぐんとそれが多くなり、2世紀になると、完全に一つの詩歌の形をして、19首残っています。「古詩十九首」と言っています。

これを見ると素朴な表現であるけれども、かなり芸術的に高い価値を持っています。ただ読み人知らずで誰がつくったかは分かりません。これは察するに、まだ新しい芸術は市民権を得ていない。だから相当上手な有名人が作詩したと思いますが、名前は名乗らなかつたのでしょう。

そのころ、何が第一級芸術だったかというところ、「賦」というジャンルです。長い散文ですが、実は韻を踏んでいる。有韻散文といっています。長いものは5千字もあります。

一番分かりやすい例でいうと、権力者が大がかりな狩りをする、狩りはイギリスあたりでは貴族のスポーツとして今で

も残っていますが、昔は大きな権力を持っている者しかできませんでした。なぜかというと、まず勢子がたくさん必要です。勢子に動物を追わせて、待ちかまえて射つわけですね。それに大きな場所、大きな森が必要で、平民、庶民のものではありません。

こういう遊びができるのは、皇帝とかその一族ですが、こういう大がかりな遊びを言葉で逐一述べるのが賦です。

「賦は敷なり」という言葉があります。ずーっと敷き並べる、狩りが始まる所から、クライマックスになって終わる所まで、さらに獲物を持って帰ってくる所まで、ずっと敷き並べる、これが1つの例です。また都は壮麗な建物がたくさんある、人も行き来する、こういったものを逐一書く。これは容易なことではできません。作るのに何年もかかるものもあります。

これは漢代になってから、楚辞の影響を受けつつ発達したジャンルです。これで作れる者は大変尊敬されます。生半可な知識や学力ではできません。賦を作る時はもちろん名前をつける。けれど遊びとして新しいものを作る時は、名乗る必要がない。だから今日では読み人知らずになっています。それがだんだん普及し

てくると、この形はおもしろいよ、なかなかいいよ、ということが起きてくる。

もう1つは賦という文学は元々そういう記録的な性格ですから、飽きられるということがあります。誰が書いても同じことになってしまい、それも権力賛歌ですから、だんだんとマンネリになって、沈滞していききました。それと反比例するように、五言詩が増えてきました。

これが交差するのが3世紀です。3世紀ごろになると人々は五言詩を自由に作るようになりました。賦はもちろんなくなりましたが、下火になりました。

### 勢いづく五言詩

3世紀というのは中国語学では大きな世紀です。3世紀の初めはご存知、三国時代です。曹操とか諸葛孔明とか、こういう連中が活躍したのが3世紀の初めです。ちょうどそのころから五言詩が勢いづきます。邪馬台国の卑弥呼はそのころの人です。卑弥呼はいづいぶん昔の人というイメージがありますが、諸葛孔明と同じくらいの年代です。このころの日本と中国の差は非常に大きいです。日本人がまだふんどしで山野を駆け巡っているこ

ろ、中国では曹操たちが活躍していました。それから後、日本は短期間で追い付いていくわけですが。

4世紀は中国では内乱の時代です。北から異民族が攻めてきました。都は占領されるし、皇帝をはじめ、貴族は殺され、皇帝の一族の1人が命からがら逃げて南に来て、臨時政府をつくった、これが東晋です。

晋という王朝の都が洛陽から南京に移ったのが317年です。都が移ってしばらくの間は落ち着きません。4世紀の終わりがごろから、だんだん活気が満ちてきた。そこに生まれたのが陶淵明です。陶淵明は365年生まれ。陶淵明の詩風は後



屈原像



世にずーっと影響して、大きな存在になります。彼は427年まで生きました。

ちょうどこの頃、中国人は大きな発見をしました。中国語はよその国の言葉とは違うという自覚です。そのきっかけは仏教です。インドから仏典がくると、インドの言葉で書かれたものを翻訳する。

その時、インドの言葉と自分たちが話している中国語の違いに気がついたのです。大きな違いは、中国語は高い・低い

声調を持っていることです。英語ではトーンですね、アクセントではない。現代中国語も声調を持っていますが、その頃の声調は今とは多少違います。今の中国語の四声は「高平」、唐の時代は「低平」と言いますが、上がる音は非常に調子が高く強いです。4声は同じです。

もうひとつはつまる音、これは現代中国語にはありませんが、日本語は持っています。つまり方に3通りあります。「p」「t」「k」です。私の名前の「石」は「せき」ですが、現代中国人は「シー」と発音します。中国人より日本人のほうが古い音を守っています。漢詩を作るときはハンディキャップになります。

話を元に戻しますと、仏典の翻訳から、中国人は、自分たちの言葉に、高い・低い調子があることに気がつきました。

それを詩に応用してみようではないか、そうすると平ばかりでも、平らでないものばかりでも調子が悪い。だから平らなものとは平らでないものを上手く組み合わせると、自然に調子が出るのではないかと考えました。

このように考えたのが5世紀です。陶淵明は5世紀の初めに死んだ人ですから、まだ気がついていません。ところが謝朓という詩人がいます。464年生まれで、499年に死んだ人ですから、5世紀後半です。後に唐の李白が大先輩と尊敬している詩人です。この謝朓の作品になると、高い・低い調子を意識しています。

どうして分かるのか。五言がありますね、それを2と3に分けて、2字目と4字目を人間の関節と見るんです。節です。2字目に平らなものをもってきたら、4字目に平らでないものをもってこよう。こういう考え方をとりました。この発見はすごくて、これで中国の詩はぐーんと深くなるのです。

次に二句一組という考え方が出てきました。二句の場合は偶数句に韻を踏みます。韻はだいたい平らな音で踏みます。さらに謝朓の時代から200年ないし250年くらいかけて、四句一組という考

え方が起こります。これがすばらしいのです。それで完成しました。

四句ワンセット、この形を発見したところが、中国の詩の最も大きなところなんです。世界最高の詩歌といわれるようになるのです。2字増えるのは6世紀になってからです。五言と七言の形ができたのが6世紀です。そうして四句、これを絶句といいますが、八句律詩、長い短いに関係ないのを古詩といいます。

漢詩というと、五言絶句、七言絶句、五言律詩、七言律詩、五言古詩、七言古詩という6つの形をわれわれは知っています。6つの形が全部できあがるのは700年ごろです。

ここまで紀元前12世紀から、8世紀まで2千年かかっています。2千年かけて、ずーっと流れて進化してきたのが漢詩なのです。こんなことをやった国は他にありません。私は漢詩は世界最高の詩芸術だと思っています。これだけ長い時間をかけて、一度も途絶えることなく、生成発展し、生成発展の途上、いろいろ工夫を凝らして、自分たちの言葉の特性にも気づいて、そうして練り上げたもので、すばらしいものです。こんな詩を持っているところはどこにもありません。

韻を踏むこと、韻の種類も決めている

のです。韻は約700年ごろにかたまって106です。そのうち平らなのが30です。この30のものを使得て詩を作る。

## 隋唐に学んだ日本

ちょうどそのころ、わが国では7世紀の初めから遣隋船、遣唐船の往来が始まりました。その前、5世紀は、5人の王様が貢物を持って中国にご挨拶に行つて、中国からは將軍の称号をもらった倭の五王時代です。ちょうど5世紀がすっぽり入ります。倭の五王が誰を指すのかというのはまだ研究中です。しかし、この頃から中国に使いを出し、中国の文明を摂取するというのが始まったわけです。

6世紀から7世紀にかけて、聖徳太子が出てきました。聖徳太子が隋の皇帝、煬帝<sup>ようだい</sup>にあてた手紙が中国に残っています。「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す、つつがなきや」と書いた。煬帝はこれを見て機嫌が悪くなったといひます。眼中にもないような東海の小島から、対等な口を聞く手紙が来たので怒ったわけですね。そこまで日本人の意識が高まったかと思うと痛快ではありません。けれどもまだまだ日本は実力がない。相撲でいえば、相手が横綱ならこちらはふん

どし担ぎでしょう、せいぜい幕下ですね。隋が滅んで唐になります。唐は7、8、9世紀のちょうど300年です。この300年間に15、16回、遣隋船、遣唐船を派遣したわけです。それでレベルの高い中国の文明を摂取しました。この300年はすごいです。日本人は、中国からきた漢字を元にして、「仮名」をつくり、「訓」を考えつきました。訓を考えついたのは大きいです。「石」を「せき」というのが「音」で、「いし」が「訓」ですね。

すべてにこれをやりました。中国の文献を見て、音と訓を上手く使うことによって、順序を入れ替えて、読めるようになったのです。これが9世紀のころです。日本人が文字を持たない時に、中国からまた漢字が入ってきた。その漢字が非常に豊富な、すぐれた文字でしたから、それを取り込むことによって、自分たちの表現を工夫して、漢文の訓読法を作ったのです。

日本人は古典を2倍持っています。自分たちの古典も作ったし、そのバックにある中国の古典もある。論語は中国の古典ですが、日本人は誰でも親しんでいます。

日本人も真似をして漢詩を作り始めま

した。一番古いのは751年編纂の「懷風藻」です。奈良時代です。このころ、中国最大の詩人である李白と杜甫も生きて活躍していました。ちなみに李白は701年生まれですから、751年には50歳、杜甫は10歳若いので40歳です。

日本人はそこから学んで、奈良、平安の時代を経て、武士の時代になりました。武士の時代になると、彼らには奈良や平安の貴族ほどの教養はありませんでしたが、代わりに僧侶が文化を受け継ぎました。また中国から高僧もやってきました。

京都と鎌倉の禅寺、今、五山と言っていますが、五山の僧侶たちの中には中国に渡って勉強した人もいます。お寺を中心とした文化の交流が行われました。これをひっくり返して五山文学と言っています。それが江戸に入りました。

江戸時代は天下太平が続きます。さきほど、7、8、9世紀の隋唐300年の話をしましたが、江戸時代は17、18、19世紀です。隋唐の時代から1000年経っています。7、8世紀300年間に、遣隋船、遣唐船の往来で摂取した文化を血肉として、勉強し続けてきて、江戸時代に花が咲きました。われわれ日本人は江戸時代に完全に外国の詩歌である漢詩を自分のものにしました。

## 日本人の漢詩

ここから日本人の漢詩についてお話します。

偶成

偶成（朱熹）

少年易老学難成

少年老い易く 学成り難し

一寸光陰不可輕

一寸の光陰 軽んずべからず

未覚池塘春草夢

未だ覚めず 池塘春草の夢

階前梧葉已秋声

階前の梧葉 已に秋声

お配りした資料に挙げたのはまず『偶成』です。作者「朱熹」に、カッコをつけていますが、実は長い間、宋の大学者（儒学者）である朱熹の作品だと信じられてきましたが、今日の研究では、なんと日本人の作だということが分かりました。先ほどの五山文学の初期のものということになっています。朱熹の作品に似た作品があり、これもそうだろうと思われるようになってきました。出来もいいです。

今これを中国語で読んでもほとんどの中国人は分かりません。古典は古典の言

葉ですし、現代中国語とも違います。

日本人は日本語で読めるので、現代中国人より日本人のほうが漢詩を鑑賞しやすいのです。このことを日本人はもう少し理解し、その特殊性に気がつくとい我想います。

日本の漢詩のピークはいつごろかという、18世紀の末ごろです。このピークのころの有名な詩人は頼山陽です。

中国人が2千年かけて作った詩歌を日本人は摂取して、それを学んで、千年かけて血肉とした。中身は自由自在に作っています。

中国人と日本人は、顔は似ていますが、頭の中は全然違います。長い風土の違いが影響しています。感性の違いが滲み出ています。

泊天草洋 天草洋に泊す 頼山陽

雲耶山耶呉耶越

雲か山か呉か越か

水天髣髴青一髮

水天髣髴青一髮

万里泊舟天草洋

万里舟を泊す 天草の洋

煙横篷窓日漸没

煙は篷窓に横はり 日漸く没す

瞥見大魚躍波間

瞥見す 大魚の波間に躍るを

太白当船明似月

太白船に当って 明月に似たり

頼山陽の「泊天草洋」の作品は、18

18年に九州一円を旅行し、このような芸術作品を完成することができました。形は六句です。六句といえば古詩です。

古詩で一番短いのが六句です。「青一髮」というのは、蘇東坡の詩歌の中の「青山一髮」から取ってきてうまくあてはめました。

そして吉村迂斎も蘇東坡のこの詩からヒントを得て「葭原雜詠」をつくり、またこの吉村迂斎の詩にヒントを得て、頼山陽がこの作品を作った。この作品には、こういう背後があるということが重要で

す。この作品について特筆したいのは、海を題材にしていることです。海南島に流された蘇東坡が故郷に帰れるという時の詩と違って、頼山陽は大きな海を飲み込むような詩を作っています。これこそ、日本人の美意識、感性だと思います。中国は海を見た人が少ないので、海の詩も少ないのです。

冬夜読書

冬夜読書

菅茶山

(1748~1827)

雪擁山堂樹影深

雪は山堂を擁して 樹影深し

檐鈴不動夜沈沈

檐鈴動かず 夜沈々

閑収乱帙思疑義

閑かに乱帙を収めて 疑義を思ふ

一穂青燈万古心

一穂の青燈 万古の心

菅茶山の「冬夜読書」は、日本の教育

をうたう最高傑作だと思います。冬は寒いから緊張します。じーっとしながら緊張して本を読むのです。

灯したまっすぐな炎を通して、孔子とか孟子とか、偉い人の面影が迫ってくるというすごい句です。

桂林莊雜詠

桂林莊雜詠 広瀬淡窓

(1782~1856)

休道他郷多苦辛

道ふを休めよ 他郷苦辛多しと

同袍有友自相親

同袍友有り 自から相親しむ

柴扉曉出霜如雪

柴扉曉に出づれば 霜雪の如し

君汲川流我拾薪

君は川流を汲め 我は薪を拾はん

広瀬淡窓の「桂林莊雜詠」は、菅茶山の「冬夜読書」を下敷きにし、冬の朝をうたいました。菅茶山の詩が、一人ですと学問をするという詩なら、こちらは先生も一緒に共同で生活をしながら、分担して作業して朝飯をこしらえるという場面を描いています。

最後に富士山と隅田川を題材にした2首をご紹介します。

富士山

富士山

石川丈山

(1583~1672)

仙客来遊雲外巔

仙客来り遊ぶ 雲外の巔

神龍棲老洞中淵

神龍棲み老ゆ 洞中の淵

雪如紈素煙如柄

雪は紈素の如く 煙は柄の如し

白扇倒懸東海天

白扇倒に懸る 東海の天

夜下墨水

夜墨水を下る 服部南郭

(1683~1759)

金龍山畔江月浮

金龍山畔 江月浮かぶ

江揺月湧金龍流

江揺らぎ月湧いて金龍流る

扁舟不住天如水

扁舟住まらず 天水の如し

兩岸秋風下二州

兩岸の秋風二州を下る

「富士山」の詩は、おとぎ話めかしているところがみそです。「夜下墨水」は、直接言葉を取っているわけではないのですが、この詩風は李白で、李白の詩風を上手く取り込んでいます。ですが、こういう詩はだんだん飽きられ、菅茶山のような生活に根ざした詩ができてくるのです。

(10月12日・講演会)

講師略歴(いしかわ ただひさ)

1932年 東京都生まれ

1955年 東京大学中国文学科卒業

1962年 同大学博士課程中退

桜美林大学、二松学舎大学教授、全国漢文教育学

会会長

斯文会会長などを歴任

2008年 瑞宝中綬章受章

「漢詩と人生」など著書

多数